

之割合ニて被下置之、

〔概席寶鑑 御目見以下大概順〕持高 御役扶持二人扶持 御普請方同心

○按ズルニ、役扶持ヲ給與セル者、此外大坂船手、書物奉行、疊奉行、代官、勘定、川船改等アリ、今其最高額、及び最低額ノモノヲ掲グ、

〔吹塵錄二十八 德川氏〕寫政元酉年分限高

五千五百八人半扶持

御役扶持

〔續々泰平年表〕安政元年正月十六日、御先手本多左京若林勘解由、金田式部、石川將監、永井能登守、坂井右近、松平藤十郎、戸川日向守、川井攝津守、内藤七左衛門、

右の面々へ、市中晝夜見廻リ被仰付、同十七日伊勢守殿より御目付へ、夷國船渡來非常の節、其方共組支配與力同心家來共に至る迄、當番の者相除、寄場等へ相詰候向は、三千石以上持高、并御役高とも、晝夜四度分御扶持方にて日々被付候に付、頭支配に於て配賦可致候、三千石已下の分は、組支配、并家來共ニ至る迄、晝夜四度の配賦被下候積リ、且乘馬秣等の儀も、二千石以下の分は、是又兵糧同様於場所御渡有之、就ては組人數、并家來下々迄の總人數、二千石以下乘馬員數取調、拙者迄早々可申聞候、尤御軍役に泥み、無益の雜人雇人等召連候儀、可成丈相省、御實備の處勘辨いたし可被申聞候、但屯所相立候夕刻より、御扶持方御渡被下候に付、夫迄の兵糧等は、銘々用意可被致候、且御扶持御賦請取方、并場所等の儀は、猶又可申達候、

役扶持渡方
役扶持受取方

〔京都御役所向大概覺書三〕覺○中

一御役扶持有之面々、來月分を前之月請取候已後、御役替り、又ハ御役被召放候時ハ、可爲返納候、但月を越候ハ、不及返納候、且又御役扶持、前之月請取候以後、相果候ハ、不及返納候事、已上